



悲しみの道(上)
パレスチナ巡礼⑧

「ヴィア・ドロローサ」 イエスは当時のユダヤ人社会で神の国にどうするか。ラテン語で「悲しみの道」「苦難の道」という意味である。改めの必要性を説いた。しかし、それらの行為はユダヤ教徒が待ち望む神を冒瀆(ぼうとく)するとしてユダヤ教の司祭や長老たちはイエスを殺そうとする人が多いただろう。

が、当時、ユダヤ教の神殿などがあつたエルサレムはローマ帝国の支配下にあり、ユダヤ人には人を裁く権利がない。そこで彼らはローマ総督のピラトのもとにイエスを連行し、十字架にかけるよう要求する。

ピラトはイエスに何の罪もないと思うが、ユダヤ人群衆の暴動を恐れ、イエスの処分を彼らに任せる。その結果、イエスは死刑判決を受け、ピラトの官邸からゴルゴダの丘まで十字架を背負わされて歩かされた。その道を「ヴィア・ドロローサ」と呼ぶのである。



ヴィア・ドロローサの道標



狭い石畳の道をイエスは十字架を背負って歩いたという

城壁に囲まれたエルサレム旧市街にあるヴィア・ドロローサの堂内にも十四カ所の留まる所、留(りゅう)が決められ、そこで祈りを捧げる。しかし、実際にイエスが十字架を背負って歩いたヴィア・ドロローサを巡礼しながら祈ることはカトリック信徒の大きな夢でもある。

私は二回、エルサレムを訪れたが、一度もヴィア・ドロローサの全行程を歩いたことがないので、今回の旅でここを歩くことも大きな目的の一つであった。「地球の歩き方・イ

て祈る信心業を、カトリック教会では「十字架の道行」と呼ぶ。ヴィア・ドロローサだけでなく、全世界のカトリック教会の聖堂内にも十四カ所の留まる所、留(りゅう)が決められ、そこで祈りを捧げる。しかし、実際にイエスが十字架を背負って歩いたヴィア・ドロローサを巡礼しながら祈ることはカトリック信徒の大きな夢でもある。

私は二回、エルサレムを訪れたが、一度もヴィア・ドロローサの全行程を歩いたことがないので、今回の旅でここを歩くことも大きな目的の一つであった。